

第1回広報検討会議の論点と課題

〔発行ターゲットについて〕

- 市の情報を一番欲しているのは子育て中の皆さん。実際に読んでいる方が高齢者と子育て世代ということであれば、全員配布というのは、ばつさりと割り切っても良いのでは。情報を知りたい世代に絞る方が良い。
- 市報にいがたを大学生が見ない理由をワークショップの中で聞いていただきたい。
- 他都市のリニューアルは、もっと若い人から読んでもらいたいということなのか。
- 子育て中のお母さんたちは、市報にいがたより区役所だよりを見ている。
- 若い人は紙を見ない。スマホやタブレットを活用している。

〔情報発信手段について〕

- 回覧板は、渡す時にコミュニケーションが取れる。災害時にも非常に有効な手段。若い世代に向けてはアプリやLINEの活用があってもいい。切り捨てる部分と、コミュニケーションの手段として残した方が良いかなというものはもう一度検討してはどうか。
- 回覧板は見守り的な使い方でもできるし情報も伝わる。若い家庭などで、途中で止まってしまうことがネック。
- 多世代で暮らしていると、自分のところまで回覧が届かないというお母さんたちもいる。
- 残す部分と残さない部分、戦略的という話が最初にあったように、そういったところは意識しなければいけないのかなと思う。
- 子育て世代は口コミでも広がる。
- 家族構成や住宅環境によっても、情報の伝達の仕方とか情報の取り方が全く違う。自分で取りに行ける人は良いが、社会的弱者といわれる人はどうするのかなどは、課題ではないか。

〔全市版と区版〕

- 静岡市は全市版のみの発行で、各区の情報はどう載せているのか。本市も協働によるまちづくりを掲げているけれど、「他の区ではこうやっている」などの情報が載っていると、他の区の参考になる。

〔紙面づくりについて〕

- 最近の学生さんは文字を読むというよりも、扱う文字量自体が減ってきているのではないかと。高齢者向けの記事はしっかりと読んでくれるが、若者だ

と写真で訴えるくらいの使い分けも必要。

- 学生はSNSの中でも、インタグラムなど視覚的なものを利用する。
- カレンダーを入れると、いつどこでどんなイベントがあるかなど、冷蔵庫に貼ったりして一目瞭然で確認できる。
- 市報の編さんに係わる職員数や情報提供をする側の体制はどうなっているか。
- 京都市や川崎市のものを見ていると、結構余白があり贅沢に使っている。ああいう風になっているとちょっとは読めるかなと思う。
- イベントなどのコンテンツをまとめて、上手く動線として流れるようにしてどうか。
- ターゲットを絞ると、重要な情報が分かりやすい紙面の作り方ができるのではないか。

【発行頻度について】

- 発行頻度の希望は地域によって差はあるのか。
- 発行回数を減らすことになったときに、2回発行の区役所だよりは1回にならないようにしていただきたい。

【配布方法について】

- 市報にいがたで充実して欲しい最も多いテーマは「食・観光・イベント」。それをこれだけのお金を掛けて全員に配布する必要があるか。
- スーパーやコンビニに設置するのも方法だが、どのように置いてもらえるかわからないのがネック。